

# 日本地衣学会

# No.11

# ニュースレター

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目次	会員通信.....	35
	南極の地衣類 - 第42次日本南極地域観測隊に参加して / 中島裕之.....	35
	ヘルシンキ滞在記 / 高橋奏恵.....	36
	ニュース.....	38

## 会員通信 From Members

### 南極の地衣類 - 第42次日本南極地域観測隊に参加して

2002年11月,第44次日本南極地域観測隊が南極に向けて出発しました。到着時には南極は夏で,比較的南極としては過ごしやすい季節です。このおよそ2年前の2001年1月及び1年前の2月に,私は昭和基地のある東オングル島から約20km離れたラングホブデという大陸沿岸の露岩域で地衣類を採集していました。その様子を簡単にご紹介しましょう。

ラングホブデのキャンプ小屋から真東には雪鳥沢という沢があります。この沢は,夏には雪が解けて水が流れており,その両岸には中流域から河口にかけて蘚類に着生した *Lepraria* sp. (レブラゴケ属) が多数見られます。景観はまさに日本の溪流そのもので,音のない南極に水のせせらぎが心地よく響きます。沢周辺には雪解けの水溜りがあり,同じコケの群落が見られます。水に浸ったところは,酸素の泡が立ち上っており,光合成を盛んにしていることがよく分かります。この一部に

も *Lepraria* sp. が着生しています。中流付近では,沢の両側に高い崖があり谷のようになっていますが,その崖の中腹には点在した橙色のものが目立ちます。*Biatorrella cerebriformis* (ホウネンゴケ科ピアトレラ属)の群落です。崖にのぼると, *Umbilicaria aprina* (イワタケ属)も帯状に生育しています。その他数種類



図1. 四つ池谷で地衣類採集をする著者 (2002.2.5)



図2. キャンプ小屋付近の沢にて記念撮影(2002.2.5)

の地衣類が生育しておりますが、特にこの2種類が目立っていました。崖の周辺では、上空を雪鳥が飛んでいます。この辺りの岩の割れ目に雪鳥の巣があるのです。一説によると、地衣類が豊富に生育できるのも雪鳥の糞が雪解け水と共に巣から流れ出てくるためであると言われています。確かに、水の流れた痕と思われる場所には地衣類や蘚苔類の他、ラン藻類の黒い筋が見られました。

雪鳥沢以外には、これより南の方角にある四つ池谷およびその近くの上釜池並びに天釜池にも行きました。四つ池谷の谷底部を登っていくのですが、この両崖にも雪鳥の巣があり、糞、羽毛、死骸が多数散在しており、地衣類や蘚苔類の生育に影響を及ぼしていると思われる

ました。地衣類としては雪鳥沢で見られた他、両脇の崖上にはナンキョクサルオガセ(*Usnea sphacelata*)が群を成していました。上釜池と天釜池の岸は大きな岩でできていますが、この上には主に *Umbilicaria aprina* が多数生育していました。この時期は常に池の水が地衣体にかかる状態で、直径10 cm以上に発達していました。一方、これらの池を囲む尾根筋にはほとんど水分が無く、乾燥した岩肌が続いていましたが、ここには *U. decussata* の群落が散在していました。先ほどの *U. aprina* と比べて非常に小さ

く、直径2 cm以下の複葉性の黒い地衣体でした。水分も乏しく、生育地として相応しくないような気がしますが、融雪時には十分に供給されているのかもしれませんが。

以上、ラングホブデの地衣類についてご紹介いたしましたが、これは南極に生育する地衣類のほんの一部ですがありません。もっと他の地域に生育する南極の地衣類にも触れてみたい気がします。ただ、21世紀の最初を南極で迎え、凍結や乾燥に耐えて生きている地衣類に出会う機会を得られたことを光栄に思います。尚、地衣類を同定していただきました佐賀大学文化教育学部理科室の宮脇博巳先生にはこの場でお礼申し上げます。

(中島裕之:久留米高専)

## ヘルシンキ滞在記

1月7日から約一週間、フィンランドのヘルシンキ大学に滞在した。私は現在、学位論文のテーマとしてヨロイゴケ属の分類を研究している。今回の旅の目的は、ヨロイゴケ属のタイプ標本借用を依頼することと、文献のコピーをすることだった。

前々から指導教官の出口先生に、「借りたい標本があるのなら直接行ってこい」とヘルシンキ行きを勧められ

ていたのだが、私の腰は重かった。海外旅行の経験がなく、実は飛行機にだって生まれてこのかた2回しか乗ったことがない。それに、なんととっても語学力の無さが私の心をいっそう不安にさせるのだった。しかし、「見たいタイプ標本も欲しい文献も山ほどあるのだ」と自分言い聞かせ、出口先生にも再三「行ってこい」と尻を叩かれ、極寒の地フィンランドへ飛び立った。



図1 . Ahti 夫妻 .

ヘルシンキまでは成田からの直行便で約 10 時間かかる . 緊張していたこともあり , 10 時間はあっという間だった ( 広島から私の実家がある秋田に特急列車で帰省すると 12 時間以上かかる . 秋田より近い ? ) . ヘルシンキヴァンター空港では , ハナゴケ属の大家として知られる Teuvo Ahti 博士が出迎えてくださった . 大先生との対面に心臓がどきどきしたが , にこにこ笑いながらやさしく話かけてくださるので , 私の緊張も徐々にほぐれていった . さらに , 宿泊先のゲストルームの案内から滞在中の食料などの買い出しまで , とても親切にしてくださいだったので不安に感じることはひとつもなかった . 初日は快適なゲストルームでゆっくりと疲れをとり , 明日からの仕事に備えた .

朝 , 外に出ると刺すような冷気で身震いがした . 寒い



図3 . Acharius 標本庫 .



図2 . Ahti 夫人と著者 .

という言葉はふさわしくない . 痛いのだ . それに , まだ夜みたいに暗いので , フィンランドに来たことをあらためて実感した . 大学に着くと , Ahti 博士が「寒かったですよ ! 今朝は - 28 だったよ ! 」と言われたのでびっくりした . とんでもないところである . 話によると , フィンランドは今の時期が一番寒いが , 今年はいつも以上に寒いとのことだった . 「なんでまたこんな寒いときに . . . 」と言われたが , 飛行機の運賃が一番安いのがこの時期なのだから仕方がない . それに , ここまで寒いと何だか楽しかった .

もちろん大学の中は暖かく , きれいに整理整頓された研究室で黙々と作業をした . 標本は鉄製の開き戸棚のなかに保管されている . Acharius や Nylander のタイプ標本は , 台帳があり , それぞれの標本がどこの棚にあるのか分かるようになっている . その他のエキシカータは種ごとにまとまっており , さらに採集された地域ごとに分けてある . 借りたい標本のピックアップと文献のコピーという毎日を送ったが , 貴重な標本や文献に囲まれた日々は , 日本を出る前の不安など感じている暇がないほど新鮮で充実したものだ . 私が不安を感じることなく順調に作業を続けられたのも , ととき様子を見に来てやさしく声をかけてくださった Ahti 博士のおかげであることは言うまでもない .

ある晩 , Ahti 博士が私をディナーに招待してくださいました . お世話になっている上に晩御飯まで ! ? とかなり恐縮したが , お言葉に甘え , おじゃまさせていただいた . 家では奥さんがシカの肉を使った手料理でもてなしてくださいました . 奥さんは植物生態学の研究者であり , 生態学では女性で初めて博士の学位を取得されたというお話をうかがった . 「あなたもがんばって博士号をとって

ね。」と励ましてくださった。ご飯のあと、Ahti 博士宅を訪れた人々が寄せ書きをしているというノートを見せてくださった。その中には、コケ、地衣の数々の先輩方の名前が書き記してあった。Ahti 博士が出口先生の名前を指差し、「これは彼がまだ学生の時に書いていったものだよ。出口先生も、みんな、若い時代があったんだ。」とおっしゃったのを聞いたとき、私もいろいろな先輩方が歩んできた道を曲がりなりに通っているのだなと感慨深くなった。そして私の名前をノートに書き記した。

とうとうヘルシンキを去る日がやってきてしまった。その日は大雪で、飛行機が飛ばないのではないかと思っただが、この程度で欠便になったりしないとのことであった。空港まで Ahti 博士が車で送ってくださった。最後まで Ahti 博士には本当にお世話になってしまった。私の英会話の力ではとてもこの感謝の気持ちは伝えることができないと思い、前日に手紙を書いていたのでそれをお渡しした。Ahti 博士はとても喜んでくださり、「あ

りがとう！うれしいよ。またおいで。今度は夏に来るといいよ。」とおっしゃってくださった。Ahti 博士とお別れし、搭乗口で大雪の空港を窓から眺めていたらヘルシンキで過ごした毎日が走馬灯のように駆け巡り、しみりしてしまっただけで、また絶対来ようと心に誓った。

今回の旅は私にとって忘れがたいものとなった。特に、Ahti 博士のご親切には心を打たれた。なぜ私のような学生にもこんなに親切にしてくださるのか。それは、これまでに数々の先輩方が築かれてきた研究者同士の絆があるからなのだと思う。研究は人と人とのつながりを広げながら発展していくものだということが身にしみて分かった。

最後にこの場を借りて Ahti 博士にあらためてお礼を申し上げたい。本当にありがとうございました。また、このような貴重な経験をさせてくださった出口先生に感謝いたします。

高橋奏恵（広島大・院・理・生物科学）

## ニュース News and Announcements

### 企画展「驚異の地衣類」開催す

標記企画展がオープンしました。会期は当初の予定よりも長くなり、5月18日まで。入場無料。日本で地衣類の企画展示が開催されるのは何十年ぶりのこと。お見逃しなく。

低地、山地、亜高山帯、高山と、日本の代表的な植生の中の地衣類の姿や、イワタケやリトマスゴケはもちろんのこと、その他にも、潮間帯の地衣類、カラタチゴケとその共生菌培養株・共生藻培養株、地衣成分の化学分析装置、「苔松」、去年話題になった「一枚岩の巨大ヘトリゴケ」などを紹介しています。

（原田浩：千葉県立中央博物館）

### 複写される方へ

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌7号26ページに。

### Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see no.7, p.26 of this publication.

### 日本地衣学会ニュースレター 11号

発行日：2003年2月22日

編集：原田浩・岡本達哉・木下靖浩・棚橋孝雄  
発行者・発行所：日本地衣学会

〒010-0195 秋田市下新城中野

秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科内